

『源順集』(226～241) 注釈

原田真理

本稿は、源順集に「右兵衛督ただぎみの朝臣、あたらしく調ずる屏風のうた」という詞書をもつ十二首(国歌大観番号226～237)とそれに続く「右近少将義孝朝臣と橘正通と囲碁うちて、やまとうた十首をつのる、正通つぐのひせめてかたらふに、四首をあたふ」という詞書をもつ四首(238～241)の注釈である。これらの製作年代は明らかではないが、順集では、康保五年の屏風歌(202～224)と「四のみこの北野に子日しにいで給へるに」という詞書をもつ和歌(225)の次に位置する。この「四のみこ」は為平親王と考えられ、為平親王の北野における子の日の遊びについては、『日本紀略』に康保二年二月「五日壬子、今日第四為平親王自禁中出北野、有子之日興、中納言師氏以下多陪従、供鷹犬」とある。また、後ろには「宰相中将藤原朝臣太郎松を君、漢書光武記よみをふる日、わたりがゆの饗まうけて文つくる又のあした、いはひの心あるうた人人よみ侍るに」という詞書の和歌(242)、「一品宮とうへと、あふぎつぐのひに、おほんごあそばして、みやまけたてまつり給ひにければ、七月七日にたてまつらせ給ふあやの文に、もじをおりてはれるうた」の詞書をもつ和歌(245)がある。一品宮資子と円融天皇との扇をめぐる催しは天禄四年七月のことであり、元輔集にも同様の趣旨で詠まれた和歌がある。順集の歌序がほぼ年代順になっていることから推測する

と、右兵衛督忠君の屏風の歌と橘正通のために詠んだ歌とは康保(964～968)から天禄(970～973)の間に作られたと考えてよいのではなからうか。

右兵衛督ただぎみの朝臣、あたらしく調ずる屏風のうた
正月、人の池水のしもに梅の花あり

二二六 こほりとく風につけつつ梅のはなゆく水にさへ匂ふなりけり

〔語釈〕○右兵衛督||右兵衛府の長官。従五位上相当。○ただぎみ||藤原忠君。『尊卑分脈』には、「藤原師氏の男、実者九条殿(師輔男)」とある。母は武蔵守経邦の女盛子。天徳二年蔵人、応和二年従四位下。○調ずる||サ行変格活用動詞「調ず」連体形。調える、調達する。○池水のしもに||池の水が流れてゆく方。○こほりとく風||水を溶かす風。『礼記』「孟春之月 東風解凍」「袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ 紀貫之」(古今集第一春上 一一)「水のおもにあや吹きみだる春風や池の水をけふはとくらむ 紀友則」(後撰集第一春上 一一)○風につけつつ||「つつ」は、動作が継続して行われるのと並行して他の事態が存在することを表す接続助詞。ここでは、梅の香が風に乗っ

て運ばれるのと同時に、流れてゆく水にも溶け込んでいる状況を表す。

〔現代語訳〕 右兵衛督忠君朝臣が、新しくお作らせになる屏風の

歌

正月、ある人の屋敷の庭で、池の水が流れて行くところに梅の花が咲いている絵に

氷を溶かす春風に香をのせながら、その一方で梅の花は下を流れ行く水に香を移し、その流れまでもが梅の香におっていることよ。

〔参考〕氷を溶かす立春の風と梅の香に加えて、流れる水と梅の香とを詠んだ。「ゆく水」に溶け込んで運ばれてゆく香を詠んだのは、新しい。

二月、旅人さくらの花をらせたり

二二七 春日すらなにかしつると人とはば見せんとをれる花なちらせそ

〔語釈〕○春日すら||長い春の日ですら。参考参照。

〔現代語訳〕 二月、旅人が桜の花を従者に折らせている絵に

長い春の日なのに、いったい何を私のところへ来てくれなかったのかと、あの人がたずねたならば、見せようと思つて折つた花なのだよ、風よ散らすなよ。

〔参考〕万葉集巻第一 五

かすみたつ 長き春日の くれにける ……

万葉集巻第十 一九二五

朝戸出の君がすがたをよくみずて長き春日をこひやくらさむ

万葉集巻第十 一九三八

あひおもはぬいもをやもとなすがのねの長き春日をおもひくらすむ

古今和歌六帖第二 一三七四

朝戸出のきみがすがたをよくみずて長き春日をこひやくらさん

三月、人の家に女ども柳の本にあそぶ

二二八 枝しげみ手にかけてそめて青柳のいとまなくてもくらすけふかな

〔語釈〕○柳の本に||柳の木の下で。○手にかけてそめて||「手にかく」は、手に懸ける意「そめて」は「初めて」と「染めて」の掛詞。○いとま||「暇」に(青柳の)「糸」を掛ける。「かけ」「染め」「糸」は縁語。

〔現代語訳〕 三月、ある人の家で、女たちが柳の木のもとで遊んでいる絵に

青柳もようやく繁つたので、そのしだれた青柳の糸を初めて手にかけて、休む間もなしに遊び暮らす今日の日よ。

四月、神まつる

二二九 夏衣きてこそまされおなじくは神のひもろきときてかへらん

〔語釈〕○神まつる||陰曆四月中酉の日に、賀茂の祭りが行われた。

○夏衣||夏の衣服。陰曆四月からは夏にあたる。○きてこそ||

「来てこそ」「着てこそ」の掛詞。○まされ||ラ行四段活用動詞

「まさる」已然形。社に参詣しておまつりしてこそ、一層神の御利益もあるというのである。○ひもろき||「ひもろぎ」「ひぼろき」とも。神前に供える肉・米・餅など。「ひもろきとく」は供

物のお下がりをいただくこと。「ひもろき」の「ひも」は「紐」の掛詞。「夏」「着て」「ひも」ときて「は縁語。」

〔現代語訳〕 四月、神を祭る絵に

夏衣に着替え、御社に参詣していつそう熱心におまつりしよう、そしてせっかくだから、お供物のお下がりをいただいで帰ることにしようよ。

五月五日、庭に馬ひかせて見る

二三〇 わかごまのときも見るべくあやめ草ひかぬさきにぞけふはひかまし

〔語釈〕 〇五月五日＝端午の節句。菖蒲を軒や車にさすほか、根の長短を競う根合わせを行った。また、競馬が賀茂神社や貴族の邸で行われ、宮中では騎射も行われた。〇わかごまの＝若駒の。「我が駒の」ともとれる。〇とき＝速さ。

〔現代語訳〕 五月五日、庭に馬をひかせて、それを見ている絵に

今日は若駒の速さを比べる日だ、菖蒲草をひくより前に、まづ駒をひきだして見ることにしよう。

〔参考〕端午の節会には、天皇が衛府の騎射をごらんになった。それに先立ち、陰暦四月二十八日に、天皇が諸国の牧から献上された馬を御覧になる駒牽きの儀が行われた。

詞書は五月五日とあるが、必ずしも五日の朝と解釈する必要はなく、それに先立つ駒牽きを詠んだものとすべきであろう。

六月、はらへ

二三一 岩浪のたちかへりせばあせきよりなごしのはらへすとや聞くらん

〔語釈〕 〇はらへ＝夏越しの祓。陰暦六月晦日に宮廷や神社で行われる大祓えの神事。半年間の罪や穢れを除くために行う。〇あせき＝井堰。川の中に杭を打ったり、石を積んだりして水を堰き止めた所。〇なごしのはらへ＝夏越しの祓。「なごし」は「和し」を掛ける。「和し」は、穏やかだ、和やかだの意。

〔現代語訳〕 六月、祓の絵に

岩に寄せる波が井堰の所からもどってきたら、夏越しの祓をして、寄せる波も夏越しの祓で穏やかになって、もどってくることはないだよ。

〔参考〕波が打ち寄せ返すことによって、夏越しの祓えをしていることを、離れた自分のもとへ伝えてくれるはずなのに、ということである。波は「和」やかになってもどつてきてくれないのである。

七月七日、庭にことひく女あり

二三二 ことのねのなぞやかひなき七夕のあかぬ別をひきとどめねば

〔語釈〕 〇こと＝国歌大観順集には、「いと」とある。諸本「こと」とあり、歌と照らし合わせると、「こと」が適当と思われる。〇あかぬ別＝名残惜しい別れ。牽牛と織女のいつまでも一緒にいたいという思いを残した別れ。〇ひきとどめねば＝力行四段活用動詞「弾く」連用形＋マ行下二段活用動詞「とどむ」未然形＋打ち消しの助動詞「ず」已然形＋接続助詞「ば」で、弾いて留めることができないのでの意。また、「引きとどめねば」で、引き留める、行かせないようにできない意。

〔現代語訳〕 七月七日、庭で琴を引いている女がいる絵に

心を込めて弾く琴の音なのに、なんともその甲斐がないこと。牽牛と織女の思いを残しながら別れなければならない、その別れを止めることができないのだからなあ。

八月、こまむかへ

二三三 武蔵野のこまむかへにや関山のかひよりこえて今朝はきつらん

〔語釈〕○こまむかへ＝駒迎え。信濃・上野・武蔵・甲斐の御牧から献上された馬を、近衛府の役人が逢坂の関で出迎える儀。○武蔵野＝東京都と埼玉県とにまたがる広い原野。○関山＝関のある山。ここでは逢坂の関のあった、逢坂山。武蔵、甲斐から京都へ入る通り路。献上される駒をここで迎えた。○かひ＝「峽」と「甲斐」との掛詞。「峽」は山と山との間。武蔵と甲斐の国はともに東海道に属し、国境を接している。京から見れば甲斐国のむこうに武蔵国が位置することになるので「かひよりこえて」といった。

〔現代語訳〕 八月、駒迎えの絵に

武蔵野から甲斐の国を越えて献上されてきた駒を迎えるのか、今朝これらの人々は山の峽を通過して逢坂山へやって来たのだらう。

九月、しがの山越の人々

二三四 山おろしの風にもみぢの散る時はさざ浪ぞまづ色づきにける

〔語釈〕○しがの山越＝志賀の山越え。京都市左京区北白川から滋賀県大津市南滋賀町に抜ける峠道。○山おろし＝山から吹き下ろ

す激しい風。○さざ浪＝小波。風のために立つ小さな波。

〔現代語訳〕 九月、志賀の山越えをしている人々の絵に

この志賀の山から吹き下ろす激しい風に紅葉が散る時は、湖面のさざ波がまず最初に色づくことだなあ

十月、山里にかりする人来たり

二三五 山里に心あはする人ありと我はしだかにかはりてぞとふ

〔語釈〕○心あはする＝同調する。また、「あはす」は、鷹狩で鳥に向かつて鷹を放つこと。鷹を向かわせる意。○はしだか＝鶴。鷹の一種。小鳥類を捕らえる鷹狩りに用いる。○とふ＝鶴が「飛ぶ」と「問ふ」との掛詞。

〔現代語訳〕 十月、山里に狩をする人が来ている絵に

山里に同じ思いの人がいるかな、目指す人がいるのかなと、私が鶴に代わって尋ねることだよ。

〔参考〕狩を口実に山里に来た男に、鷹が獲物に向かうように目指す女性がいるのか、訪れる人と同じ恋しい思いで待っている女性がいるのか、と尋ねるのである。

十一月、あじろ

二三六 あさ氷とくる網代のひをなればよれどあわにぞみえわたりける

〔語釈〕○あじろ＝網代。冬、川の瀬で氷魚などを捕るためにかける仕掛け。網を引く形に竹や木を編み連ねて立て、その端に簀を取り付ける。○あさ氷＝朝に張る薄い氷。十一月の水であるから、まだ薄くもろい。氷魚は文字通り氷のような魚であり、その泳ぐ様子を「朝氷」が解ける情景に重ねている。○ひを＝氷魚。鮎の

稚魚。○よれど＝「寄れど」と「縊れど」の掛詞。○あわ＝「泡」、形容詞「淡し」の語幹。浅薄だ、色が薄い。「沫緒」の「沫」をかけ、「縊る」は縁語。

〔現代語訳〕 十一月、網代の絵に

朝張った薄氷が解けた網代に解けた氷のような氷魚だから、寄ってきて一面うつすらとした泡のようにしか見えないことよ。

十二月、仏名、講師にものかづく

二三七 わたつみのこしの名残も今朝はあらかづくはいかにあまならずとも

〔語釈〕 ○仏名＝○かづく＝禄として布や衣服などを与える。また、頭にいただく。潜る。○わたつみ＝海を支配する神。大海。○こし＝越。北陸地方を指す。「わたつみのこし」で、越の海の意。また、「綿積み残し」の掛詞。

〔現代語訳〕 十二月、仏名、講師に禄を与えている絵に

越の海では海人が海に潜っていることだろう。その海人ではないが、今朝の講師は禄の綿を積み残したりせず、しっかりといただいているようだ、どんなにうれしいことだろう。

〔参考〕『本朝文粹』詩序の部、源順作「賀禄綿」に、残菊の宴で禄として綿を賜った学生のが記されている。

右近少将義孝朝臣と橘正通と囲碁うちて、やまとうた十首をつのる、正通つぐのひ せめてかたらふに、四首をあたふ 春のくれ

二三八 心して風はふかなん花のちるかたにや春もゆくたとづねむ

〔語釈〕 ○右近少将義孝＝藤原義孝（954～974）。一条撰政伊の男。

母、代明親王女恵子女王。『中古三十六歌仙伝』に、「天禄元年十二月十六日任左兵衛権佐。元侍従。同二年七月五日任左近少将。

同三年正月七日叙正五位下中宮御給。天延二年九月十六日卒」とある。眉目秀麗で仏道への思いが強かったこと、疱瘡にかかり、

兄左少将拳賢が朝亡くなり、義孝が夕に亡くなったことが『大鏡』に記される。家集『義孝集』がある。○橘正通＝加賀掾。『江談抄』に、順の一弟子とされる。具平親王の侍読であり、『扶桑集』

の編者紀齊名は弟子にあたる。順とは時に冗談を言つて冷やかすほど親しいものであった。参考参照。のち、宮内少丞となるが晩年不遇であった。○囲碁＝中国伝来の遊戯の一つ。「囲碁 博物

志云、堯造囲碁（音期亦作某此間云五）一云、舜之所造也」（和名抄）○つものる＝贖る。代償にする、賭ける。○つぐのひ＝埋め合わせ、賠償。ここでは囲碁に負けた正通が詠まねばならない十首の歌を指す。○かたらふ＝依頼する。正通が順に和歌の代作を頼んだ。○心して＝サ行変格活用動詞「心す」連用形＋接続助詞「て」。気を配って、注意して。○ふかなん＝カ行四段動詞「吹く」

未然形＋願望の終助詞「なむ」。吹いて欲しい。〔現代語訳〕 右近少将義孝朝臣と橘正通とが囲碁を打って、勝負に和歌十首をかけた。正通が負けて、和歌の代作を強いるので、四首を詠んで与えた。

右近少将義孝朝臣と橘正通とが囲碁を打って、勝負に和歌十首をかけた。正通が負けて、和歌の代作を強いるので、四首を詠んで与えた。

春の暮れ

花を散らさぬよう注意して風は吹いてほしいものだ。花が残りなく散ってゆく方へ、花とともに春も去ってゆくのかと、その行方を追ってみることにしよう。

〔参考〕 規子内親王前栽歌合 (源順集)

抑、順、梨壺には奈良の都の古歌よみときえらびたてまつりし時には、すこし呉竹のよこもりて行く末を頼む折りも侍りき。今は草の庵に、難波のあしのけにのみわづらひこもり侍れば、すべてわれ舟のひく人もなきさにすてられおかれたらむ心地なんしける、かかる内にもこの年頃は

161 しらけゆくかみには霜やおきな草ことのはもみな枯れ果てにけり

かく侍れば、この歌ども定め申せるさまども、いとひしらすことやうなり、猶おまへにてさだめさせ給はんやよからんとまうすをききて、正通が申すやう

162 霜がれのおきな草とは名のれども女郎花には猶なびきけり
今日の和歌を見ればなど、いひたはぶれて、まかり出でんとするほどに、

歌合の判定が女性方に甘かったと、正通が順をからかい半分抗議している。

秋月

二三九 久かたの空さへすめる秋の月いづれの水にやどらざるらん
〔語釈〕 ○久かたの〓「空」の枕詞。○さへ〓ある事物の上にさらに他の事物を添加する意を表す。くまでも。ここでは、水が澄んでいるうえに、空までもの意。○すめる〓「澄める」と「住める」の掛詞。「住める」は「宿る」の縁語。

〔現代語訳〕 秋の月

澄み渡った天空にさえ住んでいる秋の月なのだから、一体どこの水に宿らないと云うことがあるか。澄んだ水ならばどこ

にでも宿ることだろう。

あはぬこひ

なしき

二四〇 哀てふことのはもこそきこえくれよそに消えなんことのか
〔語釈〕 ○あはぬこひ〓恋しい人に逢えない恋、思いを遂げられない恋。○哀てふ〓「てふ」は「という」のつづまった形。恋しい人が自分についてもらすことば。○きこえくれ〓力行変格活用動詞「聞こえる」已然形。聞こえてきて欲しい。○よそに〓無関係に、男女の関係がないままに。○消えなん〓ヤ行下二段活用動詞「消ゆ」連用形+完了の助動詞「ぬ」未然形+推量の助動詞「む」連体形。死んでしまいうだろう。「消ゆ」は命が消えるで、死ぬ意。

〔現代語訳〕 逢えない恋

たとえ逢うことは無理としても、あの人が私のために「あわれ(かわいそうに)」と喋ってくれた、その言葉だけでも伝わってきてほしいものよ。一人片思いに苦しみながら死んでゆくにちがいない我が身のなんと悲しいことか。

あひての恋

二四一 我ながらくらべわびぬる心かないまさへなほやこひしかるべき

〔語釈〕 ○あひての恋〓恋人に逢うことができて後の思い。

〔現代語訳〕 逢って後の恋心

我が心ながらくらべかねることよ。逢う前は逢いたくてたまらず苦しい思いをしたけれど、逢えた今は慰むどころかやはり恋しくてたまらない、いったいどうすればよいのだろう。